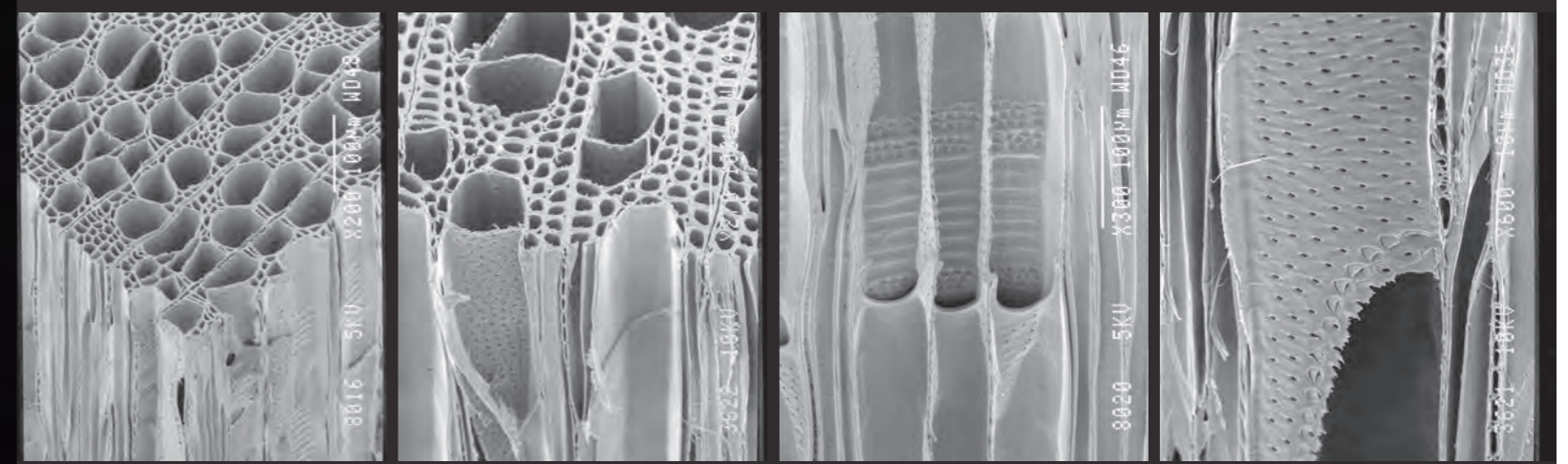
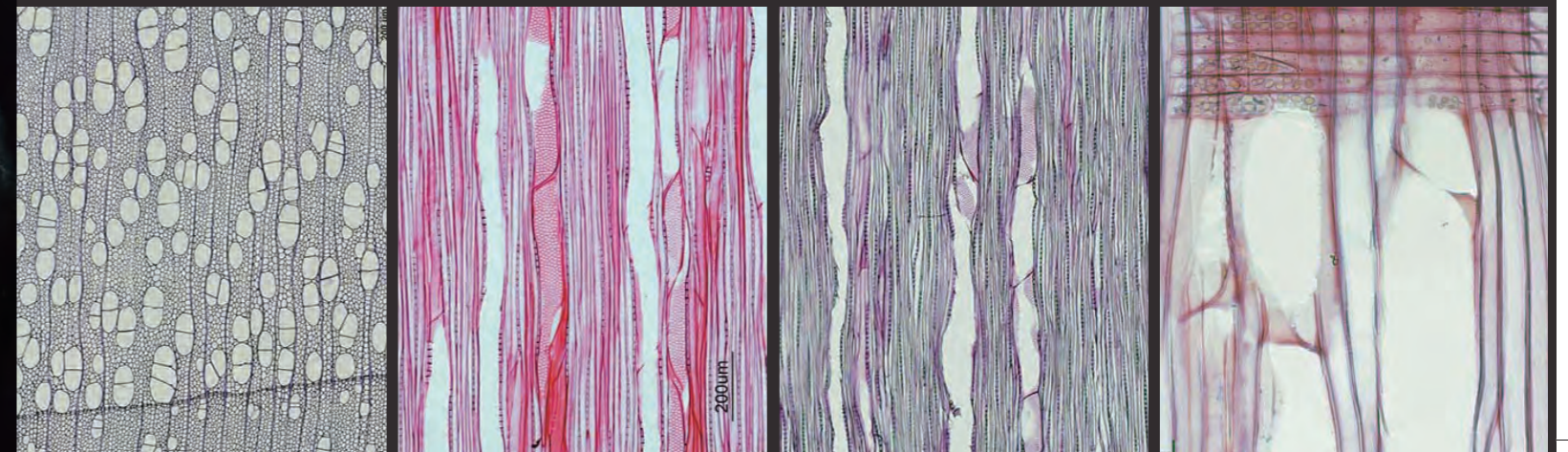


# PLY

木と人の素敵な出会いを探る



PLY 木の誌上展覧会 走査電子顕微鏡・光学顕微鏡写真「ホブラ」



写真提供：国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所

## PLY (ぷらい)

PLYとは重ねるという意味があり、WOODを加えるとPLYWOOD(合板)を意味している。歳月や経験を重ねることの重要性と、木材が年輪を重ねて成長する姿も重ね合わせている。

### 巻頭インタビュー ■ つなぐ

第14回 豊かな表情、息づく拳動。江戸木彫の圧巻を偲ぶ仏像群 仏の教えと時空の妙に誘う案内人

五百羅漢寺執事 / 学芸員

## 堀 研心

### 木を楽しもう 10

木に親しみ、木を学ぶ。

アイデアとメソッド、そしてプロダクトが満載のサービスブランド「もくらボ®」老舗材木問屋が発信する、「もっと、木のある暮らし」への提案

表紙写真：(天恩山五百羅漢寺提供)



# 天恩山五百羅漢寺



第14回

# PLY

巻頭インタビュー

## 「つなぐ」

目黒区下目黒にある、天恩山五百羅漢寺。

ここに祀られる300体以上の木彫の羅漢像は東京都指定有形文化財で、江戸期の禅僧、仏師、松雲元慶(1648〜1710)の作とされます。

釈迦の入滅後、仏典結集に集った五百人の仏弟子たちが由来とされる五百羅漢。松雲は羅漢たちを一体一体と彫り続け、15年を費やしてついに五百体を成就しました。

そのうち287体が現存し、五百羅漢寺に祀られています。そのどれもが、それぞれ独自の表情と肢体の動きを保ち、生き生きと躍動している様に目を奪われる羅漢像群です。

現代彫刻の父、高村光雲も修業時代ここに足を運び、学びました。寺は今に至るまで数奇な運命を辿り、

五百羅漢像もまた星霜を重ねて今に伝えられてきました。五百羅漢寺には、日本の近代を走りぬいた幾多の群像が、

交流した形跡も残されています。

豊かな表情、息づく挙動。江戸木彫の匠を偲ぶ仏像群の教えと時空の妙に誘う案内人

## 天恩山五百羅漢寺執事・学芸員 堀研心

### 仏像彫刻に身を捧げ、五百羅漢寺を創建した 松雲元慶の生涯

松雲元慶について教えていただけますか。

羅漢像の作者、松雲元慶は俗名を久兵衛、幼くして仏師屋に奉公し、仏像彫刻の修業を積みました。当時は、仏像の各部分が、別々の仏師屋で制作されるという、徹底した分業化世界。これに久兵衛は違和感を禁じ得ず、仏師として魂を打ち込んだ仏像を彫りたいと望み、もがき苦しむうち、鉄眼道光禪師と出逢います。大蔵経(一切経)刻版の志を抱き、資金行脚に身を賭していた鉄眼の姿に、心を打たれた久兵衛は弟子となり、剃髪して黄檗の僧・松雲元慶となりました。

仏道修行の旅に出た松雲は、現在の大阪府中津市本耶馬溪町に羅漢寺を訪ね、石仏の五百羅漢に心を奪われます。江戸に帰った松雲は、五百羅漢像を彫ろうと決意し、「五百羅漢造立勸化」と書いた幟旗を持って、市中を勧進して廻り、浄財を得ながら資金を集めようとしますが、思うようにはいきません。松雲は向島弘福寺に鉄牛道機を訪ね、力添えを願います。このとき、松雲四十四歳、鉄牛六十四歳の出逢いでした。鉄牛は厳しい言葉をかけながらも、松雲の情熱を見抜き、「これで一体彫ってみよ」と、新しい衣と金入りの包みを与えます。

鉄牛の喜捨を得た松雲は、昼は行乞、夜は一心不乱に像を彫り続ける日々を重ね、ついに最初の羅漢像を彫り上げました。鉄牛の

支援も続きます。この松雲の精進が、五代將軍綱吉の生母、桂昌院の間とこととなり、公金が下賜されることとなりました。当時、徳川幕府は江戸市中で特定の商いや、念仏講、題目、開帳などの勧進を禁じていました。つまり松雲の活動は非公認のもぐりの活動でしたが、これを機に禁令の特例として、松雲の勧進が公認され、庶民だけでなく諸大名や旗本などからも喜捨が寄せられることになりました。

松雲の辛苦を聞いた徳川綱吉により、本所五の橋の南の土地が境内地として下賜され、仮堂が建てられました。この年の元禄八(1695)年八月一日、黄檗五代住持・高泉によって点眼供養の法会が執り行われ、天恩山五百羅漢寺と号し、亡き師鉄眼を勧請して開山しました。

元禄十(1697)年、ついに五百羅漢像は完成しました。その後も松雲の制作は続き、延命地藏、白衣観音、十一面観音、菩提達磨、釈迦十大弟子、猊王像、鉄眼禪師像など、七百体を超える仏像を彫り続け、宝永七(1710)年、松雲はその生涯を終えました。享年63歳でした。

### 繁栄から、損壊、零落の日々へ、そして再興 羅漢寺が辿った運命

五百羅漢寺は、今は目黒にありますか？

徳川三代將軍家光が、天海僧正の提言を受け、江戸の鎮護、天下泰平を祈願して、江戸城



## 歴史の星霜を経て今に伝わる羅漢像たちを祀る伽藍 明治・大正・昭和を貫く、裏面史の交差路 魅力と謎に満ちた名刹



頂生尊尊者



光明網尊者



観無辺尊者



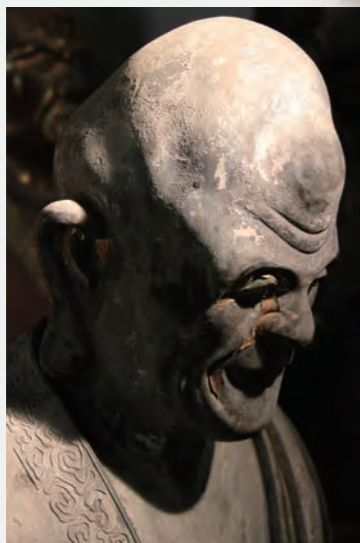
羅枯羅尊者



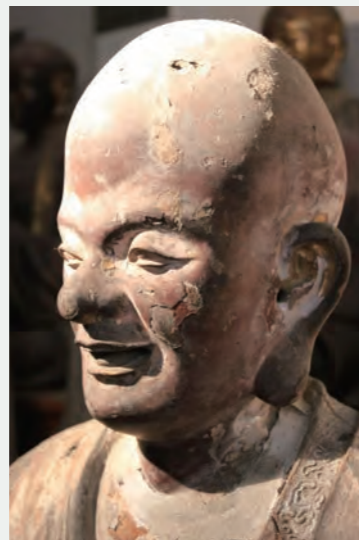
羅枯羅尊者(拡大)



摩訶迦葉尊者(表情)



法通尊者(表情)



特大医尊者(表情)



頂生尊尊者(表情)



羅漢堂内部

を中心に五箇所に不動尊を配置したと伝えられています。「五色不動」と呼ばれるようになったのは後のことですが、「五色」は陰陽五行説に因り、青・白・赤・黒・黄で、青が東、白が西、赤が南、黒が北、黄が中央とされ、東西南北四方を守護するとされています。現在の地名に残る目黒、目白などは、その目黒不動、目白不動の名残りといわれます。

第五代將軍綱吉が、松雲に下賜した土地は、武蔵野国南葛飾郡葛西領亀戸村、本所五ツ目堅川の南(現在の江東区大島三丁目辺り)とされています。五色不動の配置からすると、目黒不動のある方角の空隙を埋める位置にあります。

將軍家の庇護を得て、五百羅漢寺は江戸庶民も多く足を運ぶ名刹として栄えました。安永九(1780)年に建てられた三匠堂(さんそうどう)は、三層構造の独特の造りで話題を呼び、葛飾北斎の「富嶽三十六景」にも「五百羅漢寺さざえ堂」として描かれています。残念ながら、安政二(1855)年の大地震で大破し、東西羅漢堂、天王殿も倒壊しました。翌年安政三(1856)年には暴風雨と高潮で、壊滅的被害を受けました。

時は明治に移ります。大政奉還で成立した新政府により慶応四(1868)年太政官布告「神仏分離令」が発せられます。これは神道と仏教の分離を目的としたものでしたが、これをきっかけに暴走した民衆による仏教施設の破壊の動きを、廃仏毀釈と呼んでいます。羅漢寺もその例にもれず、甚大な被害を被りました。

五百羅漢像を見る  
— 松雲元慶の芸術的熱情のありかを探る —

「百間は一見に如かず」と言いますから、まずは羅漢像をご覧いただきましょう。

その前に、羅漢とは何か、簡単に説明を。釈迦入滅から100年後、ラージャグリハ(王舎城)郊外に500人の仏弟子たち、阿羅漢が集まったと言われ、これを仏典(ぶつてん)結集と呼びます。サンスクリット語でアラカン、これが中国に伝わり阿羅漢という表記になり、日本に伝わって後、語頭の(ア)が省略され羅漢(らかん)と通称されるようになりました。仏典

害を被りました。五百羅漢像などの松雲元慶の作品群も、多くは傷つけられたり、捨てられるという目にありました。『大日本名所図会』によると明治初年に内務省に届けられた仏像460体が、明治41年には370体ほどしか残っていなかったといえます。羅漢寺はこの年、江原郡目黒町大字下目黒六八一に移転しました。

そして大正12(1923)年関東大震災に遭遇し、羅漢寺は再び被害を受けます。寺の零落の年月はまだ続きます。荒れ寺同然だった羅漢寺は、第二次世界大戦時の東京大空襲によって、松雲の作品群はこのときも危機にさらされました。

昭和21(1946)年、羅漢寺は東京都によって史跡指定を受け、再興に向けた歩みが始まり、今日に至っています。



写真01 慧作尊者



写真02 頭陀僧尊者



阿難陀尊者

結果によって経典が統一され、これが今日に伝えられる大蔵経となります。私たちがよく知る「般若心経」は、この経典の一つにまとめたものです。

#### 【羅漢堂】

当寺の羅漢堂には、大雄殿(本堂)に納めきれない146体の羅漢像があります。それぞれ像の前に、羅漢の名と「らんさん」といふ「ば」がありますので、それを読まれながらご鑑賞下さい。

これは「慧作尊者」、ことばは「おだやかな顔とやさしい言葉」。居眠りしているようにも見えますが、安らかな悟りの境地と慈しみを感じさせますね。(写真01)

「頭陀僧尊者」、左手で器を持ち、右手は器の中にあります。ことばは「物を活かして使うのが仏の道」です。(写真02)

どれをとっても同じ表情、同じ動きはありません。仏道修行中に松雲が本耶馬溪の羅漢寺で出逢った石仏の羅漢像に魅入られたのは、羅漢たち多様な有様だったのではないかと思います。で五百人五百様を示す羅漢像が現すのはいずれも人間で、私たちが仏像と聞いて思っている印象とは違っているかと思えます。これは人間模様です。苦しみ、辛さ、悲しみ、慈しみ、悟り、安らかさ……松雲はこの羅漢像をもって、仏の教えの豊かさを伝えたいと熱望したのではないかと。

#### 【大雄殿(本堂)】

お釈迦様を中心に説法に耳を傾ける十大弟子、十六羅漢、五百羅漢たちが安置されて

います。

中央に釈迦本尊があり、右に摩訶迦葉尊者、左に阿難陀尊者が控えています。お釈迦様は右手に花を持ち、微笑んでいます。固唾を吞んで控える弟子たちに何も語ろうとはしません。これを見た摩訶迦葉尊者は微笑みしました。お釈迦様は摩訶迦葉尊者は悟りを得たようだね、と言われたという逸話です。『蓮華微笑の釈迦牟尼仏』という名の由来です。摩訶迦葉尊者の表情をよくご鑑下さい。ほんのかすかに微笑んでいるように見えます。何とも微妙です。このような表情の機微にも挑んだのが松雲の仏像の真骨頂です。さらに左の阿難陀尊者の衣の裾がわずかな風に翻っています。いずれも、当時の仏像彫刻の技法からは群を抜くリアリズムと言えましょう。

松雲元慶は、仏の教えに導かれ、その布教に生涯を捧げました。そしてそれを五百羅漢像の豊かな表現で表すことの出来る類まれな芸術家でもありました。

### 近代裏面史の舞台でもあった 五百羅漢寺の歴史

河口慧海 —— 仏典を求めて大探検行

河口慧海(1866~1945年)という人の名をご存じのかたもいるかと思えます。『西藏旅行記』、『チベット旅行記』の著者として知られる、仏教者にして探検家です。慧海の本名は河口定治郎、明治24(1891)



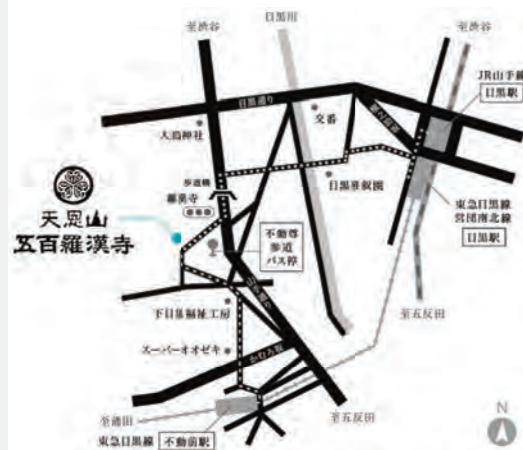
羅怛羅尊者



PROFILE 堀 研心 (ほり けんしん)

- 1975年生まれ
- 大正大学仏教学部仏教学科(浄土学専攻)卒業
- 広島市立大学芸術学部美術学科(日本画専攻)卒業
- 広島市立大学大学院芸術学研究科絵画研究(日本画)修了
- 短期大学講師を経て、五百羅漢寺の執事・学芸員として仏教文化の発展と、自己の絵画制作の研鑽に励む

「仏教美術に興味を持った私は、師僧の『仏教美術を学ぶなら、本質から学べ』という言葉に導かれ、画僧として仏道を歩んでいます。日本画を学び、美術・芸術と仏教を研究するなかで、美術を追求することは、ひとつの信仰の形であると思いました。羅漢像は、信仰と美術が一体であることを如実にあらわしています。僧侶・学芸員である私は、このすばらしい仏教美術を後世に伝えることこそが使命であると考え、広く皆様にお伝えしたいと努力しています。」



【天恩山五百羅漢寺】  
〒153-0064 東京都目黒区下目黒3丁目20-11  
TEL: 03-3792-6751 FAX: 03-3792-7800



お鯉(頭山満らと一緒に)

「お鯉」妙照が住職であった関係からか、五百羅漢寺にはさまざまな人々が入りし、交友を重ねた記録が残っています。そこには明治、大正、昭和を走りぬいた、さまざまな方面の人々の名前が重なり合っています。近代の裏面史とも言える舞台の一つであったことが偲ばれますが、記録の渉猟と検討は未だ半ばです。

江戸から東京へ、首府であった歴史を抱え、東京はさまざまな文化財の宝庫です。しかし一方で、明治維新、関東大震災、東京大空襲、終戦という大きな変遷を経るなかで、数え切れないほどの文化財が消失、散逸する歴史でもありました。

歴史の星霜をくぐりぬけ、江戸の木彫仏像の精華、松雲元慶の五百羅漢像は、多くの人の努力で守られて、目黒の五百羅漢寺に伝えられています。当寺と羅漢像の数奇な運命

にも、思いを馳せながら、ぜひ一度、足を運び下さい。

取材を終えて

五百羅漢寺は徳川綱吉により創建され、江戸の大火を生き延びた現在300体以上の羅漢像を保守・管理しています。堀研心氏は、ご自身も日本画を習得され、学芸員として活躍されておられます。

『廃仏毀釈』という歴史上の大きな波にさらされ、住職不在などの困難を乗り越え、今日、多くの貴重な仏像が守られたことの幸運に感謝しておられました。一方で、それらの仏像を限られた資金で保存する難しさについて、支援する方々の力で修復・保護を継続出来ているのだというお話でした。

五百羅漢寺は『折りの場』である為、貴重な仏像の保管状態としては極めて厳しい環境に置かれています。ご興味のある方は、折を見て参拝していただけたら支援する力となることでしょう。



釈迦本尊(中央)、摩訶迦葉尊者(向かって右奥)、阿難陀尊者(向かって左奥)

異色の尼僧、安藤妙照と、近代裏面史を彩る舞台

昭和13(1938)年、安藤妙照という女性が、羅漢寺の住職となります。妙照は本名、安藤照、もとは「お鯉」と呼ばれた美人芸者で、日露戦争の前後三回、内閣総理大臣となった桂太郎の側室として総理官邸に住

み、政界で知らぬ人はいない経歴の持ち主でした。その美貌は評判で絵葉書は何度も増刷されたといえます。お鯉は花柳界時代、伊藤博文、井上馨、頭山満、北里柴三郎、尾崎紅葉、伊藤巳代治などの名だたる人々と親交を持ち、日露戦争開戦時、山県有朋、児玉源太郎などを介して桂太郎の側室となりました。

お鯉は華やかな生活の一方で、永平寺の森田梧由に帰依参禅し、仏の教えに惹かれる精神の持ち主でした。お鯉は桂の死後、大井倉田町の静聴庵に住み、尼僧としての日々を送っていました。昭和12(1937)年秋、托鉢の途中に立ち寄った五百羅漢寺で、荒廃した寺と羅漢像を見て、その再興に身を捧げることを決意し、翌年、住職となりました。

妙照は羅漢寺の再興に向け托鉢行脚を続けながら、僧職にある者として戦争で命を亡くした人の霊を慰めるため中国にわたるなどの活動に献身し続けました。お鯉の亡き後、妹の慈雲が後を引き継いで羅漢寺の再興に身を賭しました。



河口慧海



お鯉

## 木に親しみ、木を学ぶ アイデアとメソッド そしてプロダクトが満載のサービスブランド「もくラボ」 老舗材木問屋が発信する「もっと、木のある暮らし」への提案



「木」に代わって、さまざまな新建材が多用されるようになった私たちの住環境。「木」は、ますます暮らしから遠ざかるようです。その一方、木の良さを感じ、その有用性を見直す動きも始まっています。

老舗の材木問屋を社業の創始とする、株式会社長谷川萬治商店 (HASEMAN) は木材販売、木材加工、建築事業、木製品販売など「木」に関わる幅広い業態を展開しています。その同社が立ち上げたサービスブランド「もくラボ」は、「木製品が身近にある、楽しく豊かなライフスタイルをもっと広げたいという思い」から生まれました。その活動がさまざまなシーンで注目を浴びています。

江東区富岡にある、株式会社長谷川萬の本社を訪ね、商品開発部の鈴木康史部長、もくラボ事業部の坂口新部長のお二人にお話を伺いました。



株式会社長谷川 商品開発部部長 鈴木康史氏(右)  
同 もくラボ事業部部長 坂口 新氏(左)

「木」のある環境の快適さを伝える  
多彩な提案とプレゼンテーション

「主にどんな活動をなさっていますか？ 木に関わるいろんなことをやっています。」

「一つは「空間木質化サービス」。建築事業のノウハウを活かし、店舗やオフィス空間などで、「木」を使った、温もりのある快適な空間を提案し、要望に応じて施工します。コーナーなどの小規模スペースから建物全体まで幅広く対応しています。(写真1)

人気のあるプロダクトが「KOYATENT(コヤテント)」です。短時間で組み立て可能なキット製品で、主に野外利用になりますが、木質感たっぷりの小屋です。(写真2) 木軸のフレーム構造で、パネルのサイズは600×800で手軽に組み立てが可能です。こうしたプロダクトの材料には、当社工場を用いる住宅用構造材の「端材」をリユースして使用しており、木材資源の有効

活用にも役立っています。コヤテントはキャンプ場などではプライベート空間にもなりますし、特にお子さんたちに人気です。中に入ってしまうとなかなか出てきません(笑)。男の子は秘密基地的なイメージが好きなんです。女の子たちは中でおままごとをしています。(写真3) 外壁にボルダリングを設けた造りも人気です。

こうしたプロダクトを、幼稚園や保育施設などでご利用していただくケースの他、カスタムオーダーで海の家の飲食ブースなどに利用頂いた事例もあります。(写真4)

展示会や地域のイベントに向けて、組み立て・撤去が可能な木フレーム部材のイベントブースを提案しています。写真は、地元江東区の深川ウッドフェスに出したイベントブースで、ハセマンと他12社の企業コラボ企画です。このイベントは2019年のウッドデザイン賞を受賞しました。(写真5)

こうしたプロダクト以外にも、最近ではコロナ対策用の木製パーテーションやパーソナルWEB会議ブースなどを販売しています。(写真6)(写真7)

豊富な木育ワークショップメニューの蓄積

木に親しみ、木を学ぶワークショップは、20通りぐらいのアイテムが揃ってきました。ご依頼に応じて、木工体験など木育ワークショップを企画・運営しています。まずは、子どもたちに、木を見て、触れて、親しんでもらうことを深く、触れて、親しんでもらうことを主眼とした取り組みです。たとえば、「木のペン立てづくり」ですが、さまざまな広葉樹の樹種から選んでもらい、それぞれの樹種がどんな特徴を持っているのか体感し、学んでもらいます。例えばサクラであれば水に強い性質を持ち、家庭では茶筒などの木製品になっているとか、身近な生活とのつながりを感じてもらえるレクチャーを用意して

ます。

もう一つ大きなテーマは、「森林の循環サイクル」を伝えることです。植林・間伐・伐採・製材…このサイクルがなぜ必要なのか。それは森林によって二酸化炭素の吸収、水源保護や土砂災害の防止などに役立つことなのですが、小学生からなら理解してもらえません。こうした活動を礎に、当社では2015年に「ウッドスタート宣言」を行いました。これは、子育てに木材を積極的に活用しようとする「木育」を推進の取り組みです。(写真8) 市町村や企業が「宣言」して地産地消の木材を活用する試みで、群馬県上野村と当社との連携が実現しました。

もくラボ事業は準備室の開設からスタートして5年になります。今は新型コロナウイルス禍で木育イベントが出来ず、ちよっと足踏み状態ですが、もくラボでは今後も、幅広いコラボレーションに挑戦し続けたいと思います。



写真1 店舗の木質化事例



写真5 木フレーム部材を用いたイベントブース



写真6 個人用WEB会議用ブース



写真7 飛沫防止用の木製パーテーション



写真8 木育イベント事例

木を守る。木を生かす。  
**HASEMAN**

株式会社長谷川 開発本部 もくラボ事業部  
〒135-0047 東京都江東区富岡2-11-6  
WEB <https://mokolabo.com/>  
E-Mail [info@mokolabo.com](mailto:info@mokolabo.com) TEL 03-5245-1151

## 2

## 公益財団法人 PHOENIX 2020年度 奨学・育英事業及び研究助成事業 実施報告

## ◆奨学・育英事業

当財団では、江東区内に在学する高校生に対し、向学心がありながら家庭の経済的な理由により、修学が困難な学生に対して返還義務のない給付型の奨学援助を行っており、今年度は以下の6名を採用いたしました。

東京都立江東商業高等学校	2名
東京都立深川高等学校	1名
東京都立東高等学校	1名
芝浦工業大学附属高等学校	1名
中央学院大学中央高等学校	1名

## ◆研究助成事業

当財団では、我が国の木材関連分野の発展に寄与する研究を行っている若手大学院生に対し、研究調査にかかる直接的な財政支援を行っており、今年度は以下の3名を採用いたしました。

所属	学年	氏名	研究課題名
東京大学 博士課程	2年	森井 拓哉	木材産業連関表の作成による統計基盤整備
東京大学 博士課程	1年	石岡 瞬	多重積層によるナノセルローズ透明板材の形成と寸法-特性相関
静岡大学 修士課程	2年	篠原 朋樹	ビス引き抜き耐力推定精度の向上-木材の三次元密度分布を用いた推定の検討-

## 1

## 公益財団法人 PHOENIX 理事長 ご挨拶



当財団では主に博物館事業として木材や合板の展示を中心に、各種セミナーや木工教室などを通して「木を知り、木を使い、木を活かし、森と生きる」について考える機会を提供し、子供の頃から木と触れ合い、学生が木の可能性を知る場となり、木材および合板関連企業の方々が、技術開発のヒントを得ることの出来る場を提供していく所存です。また、未来を担う若者の育成に寄与するための人材育成プログラムや経済的理由により就学が困難な高校生への給付型奨学金をはじめ、木材関連の研究に関わる若手研究者育成のための助成金給付を行い、日本の未来を担う人材の育成を目指しております。

今後とも皆様の幅広いご支援、ご協力を宜しく願っています。

理事長 吉田 隆

## 公益財団法人 PHOENIX 木材・合板博物館 館長 ご挨拶



当博物館は木材や合板をはじめとする木質材料に関する正しい知識や新しい情報を様々な階層の方に広く普及させることを目的として設立されました。昨春に館長就任して以来、館にもだいぶ慣れ、新しい方向性も出したいと模索していた矢先、新型コロナウイルス問題が発生してしまいました。博物館は多数の方に来ていただき、展示物を直接見たり触ったりすることで理解していただくのが本来の姿なので、現在のような開館もおぼつかない状況下で、社会的な役割を果たしていくためにはどうしたら良いかを模索中です。ホームページの充実やWebを利用した講習会等、可能などころから新しい「常態」に対処していきたいと思っています。皆様のお知恵を拝借できれば幸いです。

木材・合板博物館 館長 太田 正光

**公益財団法人PHOENIX 木材・合板博物館のご案内**



**開館時間** 10:00~17:00 (最終入館時間16:30)

**入館料** 無料

**休館日** 月曜日、火曜日、祝日、年末年始

※幼児および小学生の入館には、保護者のつきそいが必要です。  
※都合により開館日・時間を変更する場合がございます。

**所在地** 東京都江東区新木場1-7-22 新木場タワー3F・4F  
TEL 03-3521-6600 / FAX 03-3521-6602

**アクセス 1** ●東京メトロ有楽町線●JR京葉線●東京りんかい高速鉄道  
「新木場駅」下車 徒歩7分

**アクセス 2** ●東京メトロ東西線  
「東陽町駅」下車  
→ 都営バス [②のりば] 木11甲  
「新木場一丁目」バス停下車 徒歩1分

このビルの3F-4Fです!




facebook HP

<https://www.woodmuseum.jp/>

# PLY

第14号 2020 AUTUMN

【発行日】 2020年9月10日 ■定価：1,100円(消費税込)  
【発行】 公益財団法人 PHOENIX 木材・合板博物館  
〒136-8405  
東京都江東区新木場1-7-22 新木場タワー3F・4F  
TEL 03-3521-6600 / FAX 03-3521-6602  
E-mail info@woodmuseum.jp  
【発行者】 吉田 隆  
【編集】 太田正光(編集長)  
PLY 編集委員会  
【デザイン】 株式会社デジタルアート

## 編・集・後・記

今号の巻頭インタビューでは、昨年10月の博物館セミナーにご登壇いただいた堀研心氏に木彫仏像を多数保有する五百羅漢寺にまつわるお話をいろいろとお聞きました。また、「木を楽しもう」のコーナーでは木材の良さの普及や木育に積極的に取り組んでいる長谷萬さんの「もくらボ」を紹介させていただいた。東京オリンピック・パラリンピックが予定通りに開催されていけば、木材をふんだんに使用した複数の競技会場や選手村を多くの人々が目にし、今頃は木材を使用することの地球環境への貢献や、利用法の新たな可能性への国民の理解が大いにすすんでいただろうことを思うといささか残念である。(o)

裏表紙

## PLY 木の誌上展覧会 第14回 走査電子顕微鏡・光学顕微鏡写真「ポプラ」



ポプラの凍裂材

ポプラという一般的な方々にも馴染みのある呼び名だが、実際には和名でポプラという樹は存在しない。ポプラの仲間は、ヤナギ科のヤマナラシ属またはハコヤナギ属の樹木であるが、英語表記すると poplar、cottonwood、aspen などとなる。この属の樹木は交配が容易なために世界中に交雑種が多数存在し正確な分類が難しく、一般名としてやむなくポプラ (poplar) と呼ばれることになったというのが実際のところといえるだろう。

日本のポプラの原生種はドロノキ及びヤマナラシであるが、両種は日本の北方及び山岳地帯に分布する落葉高木であり個体数も多い。一方、欧米にはセイヨウハコヤナギ、ギンドロやヨーロッパヤマナラシなど同じ属の種が多数存在し、またイタリアでは古くから研究が行われて多くの交雑種が生み出され、さらに中国では戦後になってこれらの欧州からのポプラと原生種などを交雑したものが多数存在している。

この属の木材の特徴は、軽軟で心材色が一般に白っぽいものが多く、シナノキに色味が似ていることから中国では合板用材として多く用いられている。また、北米では OSB (oriented strand board) の主原料となっている。筆者が30年程前に中国に滞在していた頃には成長が早いものができるので改良ポプラの試験研究が盛んで全国的に試験植栽されていたが、一方でこの属の樹木の心材は一般に多湿心材をもつものが多く寒冷地ではそれによる木材の凍裂発生が大きな問題となっていた。また、ポプラの樹からは、夏になると種子を包む白い綿毛が飛び交うようになり、中国では柳絮と呼ばれ cottonwood の名の由来ともなっている。日本では、製紙会社がパルプ原料として改良ポプラに期待をかけ一時期盛んに北海道などで植栽研究を行っていたが、近年では海外のユーカリなどの早生樹に取って代わられている。その名残でもないだろうが北海道大学のポプラ並木に代表されるように札幌近郊では様々な場所にポプラが見られ観光名物となっているが、この柳絮の洗濯物への付着やアレルギーなどが問題となっている。

木材・合板博物館 副館長 平川泰彦

## イベント情報 Event information



1907年(明治40年)11月3日は  
浅野吉次郎氏が日本で  
最初に合板を製造したとされる日です。

**11月3日は、  
合板の日**

日本のベニヤレース第1号機

合板の日実行委員会

### ◆第8回「合板の日」記念式典中止のお知らせ

本年11月6日に予定しておりました『合板の日』記念式典につきましては開催を中止することとなりました。

誠に残念な決定ではございますが、ご承知のとおり今年3月頃から流行が始まりました新型コロナウイルスによる、感染症拡大を防止する観点からこのような決定となりました。ご理解頂きますようお願い申し上げます。

※イベント・セミナー情報はホームページでご確認ください。 <https://www.woodmuseum.jp/wp/seminer/>

【お問い合わせ】 木材・合板博物館 TEL 03-3521-6600 / FAX 03-3521-6602 E-mail info@woodmuseum.jp